

熟年俳句誌

1 2013年
月号

かたね

ふ



黒羽集

(十二)

佐藤喜仙

冬の雨止みて土より匂ひたち

辛崎の松もかくやと小六月

投げ呉れし焼麩をきそふ鳩と鯉

実千両茅葺き酒肆に石灯籠

円月橋石は冷たく光りをり



初明り一筋となり攻めきたる

あらたまの雀のこゑも晴やかに

なじみたる都会の空とちがふ秋

和するごと子供等の声鶉の声

鶉の声老多き街に響きけり

雁や果てなく深き空の蒼

行く秋や渡しの舟も揚げられて

かやね集

白選句集



「秋深く」

松本周二

しめやかに水子不動の秋日和

十三夜シユールレアリズムとは具象

返り花遅しきともか弱きとも

秋灯の木の間隠れに二三軒

九十九折れ坂の紅葉の鞍馬かな

すすき野や平城京趾暮れ急ぐ

「案山子」

古川千鶴

山峡に船すべりゆく紅葉晴

踏み入りて靴に水滲む蓼の花

廃線の鉄路の歪む泡立草

濁り酒呉須徳利に盃の蓋

抜錨の巨船の波紋雁渡し

乗り出して棚田を覗く案山子かな

「秋の潮」

川井素山

陸稻刈り鎌の刃先に光る汗
城址の園縄目新らし雪囲
八十路来て雁木の街に面影なく
障子貼り手元あやふき肥後守
冬の空下呂の駅湯に手を入るる
水門に魚影の列や秋の潮

「心太」

安藤虎醉

せせらぎに身を沈めをる心太
職人の袷纏枕に三尺寝
雨戸あげ首すくめけり今朝の冬
狛犬も手持無沙汰の神の留守
口切や客待つ畳新しく
メタボりも気にせず夕餉秋の鯖

「初日の出」

菅原 孟

初日の出拝む心の清らかさ
祠から銭洗ふ音初巳の日
正鵠を射るは心の弓始め
巫女の搗く餅頂くや初戎
ちやきらこ踊る小女に母の歌
香煙に触れて詣でる初大師

「山茶花」

田島昭久

落葉踏み走るジョガーの夕陽浴び
音もなく木の葉散る散る初冬かな
木々の間に小鳥の声と木守柿
櫨紅葉庭色どりて老夫婦
秋明菊初めて咲いて小じんまり
無住家や山茶花周り散り積もる

撫子集

主宰選



米田文彦

立冬や倉庫の壁のひび模様

蜘蛛の巣に小さき眞珠や朝の露

新米とみその旨さや今朝の膳

街角のカフェに絵を描く小六月

木犀の香にふり仰ぐ深空かな

出番待つ張子の蛇に小春風

手捻りの蕎麦猪口並び冬うらら

掃き残す茶亭の庭の柿落葉

スカイツリー影長くして冬に入る

病棟の潜り戸辺り焼芋屋

小池清司

本郷宗祥

うさぎ抱く満月真上代官山

石路の花固きつぼみも持ちてをり

秋晴れや航跡多き東京湾

台場跡色変へぬ松の五六本

砂浜に人影もなく秋深し

マフラーや朝のホームの高校生

飛行機のおかり点滅秋の宵

大根干す蕤捲れる夕間暮れ

暖冬や野球部の子の朝練習

夜も更けて大根煮るや古女房

岡野安雅

秋景色千変万化の風の舞

山本達人

夕暮の魯田さみし北の国

新蕎麦の香り豊かに友集ふ

列島の二つの海に秋二つ

雨上る虹の根元の紅葉かな

鉢植の鶏頭を置く不動産屋

小林美登里

白ワイン売る店の庭酔芙蓉

秋燈や夜も寝てゐる猫の影

店の棚あふれるさまの秋果かな

棗の実熟せども取る人の無き

亡き母の手と重なりて障子貼る

長久保郁子

帯解の子のおとなしき写真館

夜の底へ白山茶花の散りやまず

ベランダを半分濡らし時雨過ぐ

露の世のかたみに骨をのこしけり

紅葉山一瞬燃えて夕陽落つ

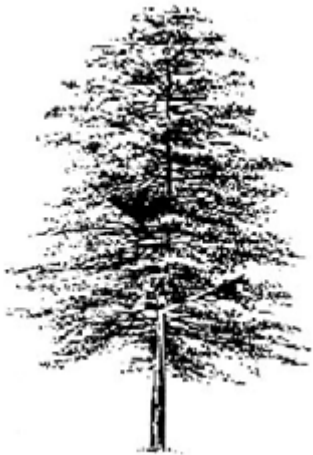
青木英林

欠伸して空仰ぎみる小春かな

縁側に老婆と猫の日向ぼこ

竿ひねり枝ごと挽ぐやたわわ柿

蕎麦刈りのただサクサクと鎌の音



那須野集

主宰選



紅葉に燃ゆる信濃路空青し

丸山酔宵子

暮初むる空に枯葉のシルエツト

池内とほる

山染むる紅ひときはななかまど

自販機にホットコーヒー冬近し

木漏れ日に光る蜘蛛の巣秋の朝

露天風呂湯気吹き散るや山紅葉

塀を超えまだ咲く朝顔そぞろ寒

朔風に穂先膨れし薄かな

焼きトンの香りよきかな爛の酒

葦沼の粘る水面に陽の揺れて

落葉掃く僧につきつき散る柳

橋本修平

白菜の山積されし畦の道

後藤克彦

オカリナをさやかな風に乗せて吹く

読みながら又手の伸びる落花生

賑はいのお稻荷の先菊人形

植ゑ込みに隠れてくしやみ金木犀

枯蔓で束ねた薪を軒の下

前線は北から南秋桜

いろは坂紅葉黄葉のつらなりて

踏みしめる落葉あざやか紅葉狩

柳田皓一

秋霖や相合傘が街をゆく

菊地崇之

立冬や街のシャッター閉ぢしまま

山上湖山々ごとの紅葉かな

遠嶺や小春日和のひもすがら

ゆく秋や古寺の水含みけり

青蜜柑船の行き交ふ瀬戸の海

小春日や弁当ひろぐる園の芝

神無月家に籠つて一人酒

しぐるるや餌付けの鳥の鳴きやまず

秋宵に一時まどろむ夕餉かな

長島清山

過疎村に新そば有りの昇り旗

森岡陽子

オバマ当選さんま喰ひたる夕の膳

駅伝の伊勢路走るやいわし雲

秋灯のほのかに見えて酒すすり

卒業のその後いかにや秋日和

柿紅葉散り落つる葉もありにけり

日暮時柵にならびし熟柿かな

初時雨ひぎをかかへて長電話

木犀のかおりのありてふり返り

はるかなる筑波の山や熟し柿

吉田博行

満月や鉄の香匂ふ露天風呂

和田勝信

柿の実の枝越しに見る筑波山

危なげにふらつく神輿秋まつり

紅葉の取り巻く裾野白き富士

錦秋の屏風が走る車窓かな

奥山に小鳥飛び交ふ日暮れかな

草紅葉掻き分けめざす秘湯の宿

秋茜ダムに埋れし元湯かな

秋時雨寂びれし宿に聴く夜かな

切り株にハンカチ忘るもみじ狩

家々に早ばや灯る初時雨

岩かげに竜胆一輪峠口

霧立つや山小屋さけて野鹿棲む

雲早し色を重ねる山紅葉

田中清秀



撫子集・那須野集鑑賞十一月号より

撫子集

客員 村上克哉

落鮎や箔の剥けたる仏たち

小池清司

鮎は産卵のため川を下る、九、十月ごろ産卵期が近づくにつれ鱗もさびて大きくなった体には、栗粒状のものが出来て体色も黒ずみ、錆鮎、寂鮎、渋鮎ともよばれる。産卵後は消耗して衰えそのまま死ぬか、海に入って死ぬ。箔の剥けた仏像は快慶の弥勒菩薩像だろうか、仏像との取り合わせに晩秋のあわれを一入感ずる。

秋郵の句に「落鮎に星曼荼羅の深夜かな」がある。

豆腐売り残暑の中にラッパ吹く

田島昭久

立秋を過ぎてもなお残る暑さは何ともいえない疲労感、倦怠感があるが今年も猛暑日が九月まで続いた。最近も余り見掛けなくなつたが自家製の豆腐や油揚げ、がんもどきを単車の荷台に乗せ売りにくる。残暑の中に哀調を帯びたラッパの音が「とーふ」尾をひいて鳴り渡る下町の懐かしい情景。物憂

さか、秋の兆しをかんじたのか。

湿原にきしむ木道水芭蕉

米田文彦

高原の湿地に自生する水芭蕉は五、六月頃白色の仏焰苞をもち、多数の緑色の小さな花が密生する。花が終わるとバシヨウに似た肉厚の大きな葉がひろがる。尾瀬ヶ原のミズバシヨウは「夏の思い出」に歌われ有名、尾瀬の木道は総延長六十kmにも及び七年に一度敷き替えられる。湖の静謐な中に真っ直ぐ延びる木道のきしむ音と、澄んだ空気と清潔な水芭蕉が印象的だ。

雨上り声に張りある秋の蝉

本郷宗祥

早朝から鳴いている蝉の声も九月に入ると少なくなってくるが、油蝉やみんみん蝉などは秋になつても鳴き、蝸、法師蝉などは初秋になつてから鳴き始める。夕立か不意の雨が上がり、最初に鳴き出すのはみんみんか蝸の終の一声か「秋蝉の鈴一千の振りをさめ」の句がある。声に張りのあると捉えた感覚は情景が伺え情感が深い。(以下略)

伝言板

1 第十三回本部句会(原則第二金曜日)

①日時 2013年1月11日(金)

14:00~17:00

②場所 目黒区「下目黒住区センター」

3階会議室

③投句 当季雑詠 5句

④会費 1000円

2 第十四回本部句会

①日時 2013年2月8日(金)

14:00~17:00

その他事項は第十三回に同じ

3 第十三回吟行(原則第四火曜日)

日時 2013年1月22日(火)

場所 小石川後楽園

所在地 文京区後楽1-6-6

交通 JR中央線・地下鉄東西線

有楽町線・南北線・大江戸線

各線の飯田橋駅から徒歩8分

集合 正門前 11時

昼食 各自持参但し食堂あり

句会場 正門横「酒徳亭」

句会 13時30分~15時30分

出句数 囀目3句

費用 交通費・入園料(300円)各自

会場費その他は参加者均等割り

申込み 喜仙宛1月20日まで

(FAX又はTEL)

4 第十四回吟行

日時 2013年2月26日(火)

場所 上野・子規庵・羽二重団子

集合 JR上野駅公園口改札出た

ところ 11時

詳細は次号にて

5 お知らせ

①撫子同人田島昭久氏をかさね同人に
推挙いたしました。氏は喜寿から俳
句を初めた晩学の徒ですが、句会、
吟行会に熱心に参加され、俳句に真
摯に取り組まれております。現在
八十二歳

②那須野会員青木英林氏・長久保郁子
氏を撫子同人に推挙いたしました。

6 「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」
欄がございますので、句評、近況報告、
ご意見などご自由にお寄せください。
なお友の会の皆さんは特別作品(十
句)、随筆、その他論文等をいつでも
投稿することができます。お待ちいた
しております。

会員募集

何時からでも「かさねの友」に
なれます。

年会費 12000円(前納)

ただし年次途中入会者
は入会申し出の翌月より
12月まで月割りで納付

見本誌 四百円(切手可)

見本誌請求先

15210033

東京都目黒区大岡山2-7-5

かさね俳句会 佐藤喜仙

「かさね」俳句の基本

I 前提

- 一、俳句は世界最短の「詩」である。
- 二、有季・定型・文語体を旨とする。

① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

② 有季の原則

原則①

「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

原則②

「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を「表季語」と称する」

原則③

「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

原則④

「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

原則⑤

「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

③

文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

II

俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。

現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現

主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞

地名・固有名詞は一句の中にあつて季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切

形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。

例 完全な三段切 奈良七重七堂伽藍八重桜 芭蕉

三段切でも可 初蝶来何色と問ふ黄と答ふ 虚子

五、前書・ルビ

前書は慶弔の句にのみゆるされる。

ルビは誌中では使用しない。

III

俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。